

2015.3.31	$151,000 \div 474,000 = 31.9\%$
2016.3.31	$153,500 \div 472,500 = 32.5\%$
⑤売上高経常利益率	
経常利益 ÷ 売上高 (%)	
2015年度	$23,893 \div 1,000,000 = 2.4\%$
⑥売上高営業利益率	
営業利益 ÷ 売上高 (%)	
2015年度	$30,000 \div 1,000,000 = 3.0\%$
⑦売上高総利益率	
売上総利益 ÷ 売上高 (%)	
2015年度	$400,000 \div 1,000,000 = 40.0\%$
⑧商品回転率	
売上高 ÷ 平均在庫 (回)	
2015年度	$1,000,000 \div \{(180,000 + 190,000) \div 2\} = 1.4$ 回
⑨有形固定資産回転率	
売上高 ÷ 平均有形固定資産 (%)	
2015年度	$1,000,000 \div \{(200,000 + 162,350) \div 2\} = 1.4$ 回
⑩労働分配率	
人件費 ÷ 売上総利益 (%)	
2015年度	$160,000 \div 400,000 = 40.0\%$

本来これらの指標は2級の「販売・経営管理」で学ぶところだが、科目免除になった読者や、まだ自信を持って解答できない読者のためにも本項でおさらいしておこう。

上の10項目のうち、①～④は「安全性」、⑤～⑦は「収益性」、⑧～⑩が「生産性」に関する指標として、3ブロックに分けられる。安全性指標は貸借対照表、収益性指標は損益計算書、生産性指標は双方を用いる。

(1) 貸借対照表と安全性指標

まず、企業にとって作成が義務づけられている財務諸表のひとつ、貸借対照表の構造を理解しよう。これは、ある瞬間の財務「状態」を示す。左側では使い道、すなわち企業が現在何をどれだけ持っているかを示す。一方、右側ではその

出所、すなわち自分たちのお金（純資産）なのか、支払ったり返済したりしなければならぬお金（負債）なのかが見える。いうなれば「裏事情つき財産目録」である。

資産にも負債にも「流動」と「固定」とがある。流動資産とは在庫および1年以内に現金化できる見込の売上や有価証券であり、流動負債とは1年以内に返済義務のある借金や掛けで仕入れた商品の支払い残高である。

これを考えると、左側は上にあるほど、右側は下にあるほど手元の現金残高を増やす働きをしている（純資産は返済不要）といえるだろう。

●図表2-1 貸借対照表の基本構造

左 (モノ) : 運用 (使い道)				右 (カネ) : 調達 (出所)			
資産	流動資産 (1年以内に 現金化可能)	現金・預金	当座資産	負債	流動負債 (返済1年 以内)	買掛金	仕入債務
		売上債権				支払手形	
	棚卸資産	商品	短期借入金				
固定資産 (長期使用)	有形固定資産 (建物・設備等)	純資産	株主資本	固定負債 (返済猶予 1年超)	社債		
	無形固定資産 (権利等)				長期借入金		
	投資その他の資産 (投資等)			資本金、資本剰余金、利益剰余金			
資産合計				負債・純資産合計			

そして、左右の合計金額（資産合計と負債・純資産合計）は一致する。出所不明な持ち物があってはいけないからである。

次に、安全性を理解しよう。安全性とは、元本が保証されている度合いを示す指標、つまり、会社が倒産しそうか大丈夫かをみるものである。（倒産、俗につぶれる、とは「もうお上げです、今の手持ちの財産をすべて換金しても払えません、許してください」となった事態を指す。だから、プロである販売士のあなたは、お店が閉店しても「つぶれた」などといってはならない。）

元本が保証されているほど安全性が高い。以下に示す①～④が代表的指標である。まず、現在の財務状態で、直近の返済ができるか否かの「短期支払能力」を示す指標を2つ挙げる。仮に、直近の返済義務がある流動負債の債権者に「今すぐ耳を揃えて支払え」と迫られてもクリアできるかをみる指標である。

① 流動比率

流動資産 ÷ 流動負債 (%) : 200%以上が望ましい。